

STEAM防災学習「ゼロから始める避難所設営」

【活動内容の特徴】

地域の実態に合わせた教科横断的な防災学習

- ・経済産業省のSTEAM Libraryを活用し、教科横断的な防災学習を実施した。
- ・水害発生や避難の理論を学ぶだけでなく、**プールの歩行**や**避難所の設営**などの実践を行った。

【団体の紹介】

- ・大垣市立東中学校
- ・今年度より活動に取り組んでいる
- ・2年生 生徒数226名
- ・「考える 協力する 実行する」を学校の教育目標に、「生徒が創る自分の学校」づくりを目指している。

【アピールしたい防災活動の成果】

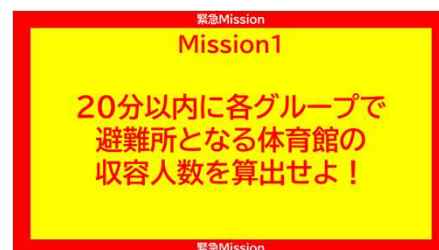
被災経験のない生徒たちに、**防災意識が芽生えた**

中学2年生は水害を経験したことがない

↓

ある生徒の学習後の記述

「水害に備えて、普段から防災用品を用意しておきたいと思った」



【活動内容の詳細】

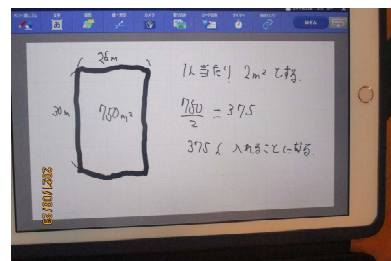
全8時間で水害避難の理論と実践を身に付ける

【理論を学ぶ】

- I 水害発生メカニズムを知る（ハザードマップを利用）
- II 避難の方法を知る
 - ・河合琢也氏（「未来の教室」EdTech研究会専門委員）のご指導の下、社会・理科・保健体育・特別活動などの教科・領域を横断させた授業を実施した。
 - ・ハザードマップを読み取り、自宅や近くの学校がどれくらい浸水するのかを確認した。

【実践で学ぶ】

- III 水を張ったプールを目隠しをして歩く
 - ・夜間の浸水を想定し、15cmほど水を張ったプールを歩いて、避難の難しさを実感した。
- IV 避難時の対応につながるクロスロードゲーム
- V GIGAタブレットをフル活用した避難所設営訓練
 - ・中学校の体育館が避難所になったと想定した。
 - ① 歩測で体育館の面積を割り出し、収容人数を計算した。
 - ② 収容人数をもとに、避難所のレイアウトを考えた。



【活動成果】

<実施者から見た効果>

- ・生徒の水害に対する防災意識を向上させることができた。
- ・これまで各教科で行ってきた知識を組み合わせ、学習を進めることができた。
- ・生徒たちが主体的にタブレットを用いて活動し、自分たちで問題を発見して、解決する力を育むことができた。

<参加者等から見た効果>

（生徒の記述から）

- ・自分の家の1階が浸水してしまうかもしれないことを初めて知った。
- ・暗くて足元が見えないのは不安なので、水害のときは早めに避難したいと思った。
- ・実際にやってみて、避難所には通路や受付のスペースが必要なことに気付いた。

小・中学校防災教室 ～地域の子どもは地域で守る～

【活動内容の特徴】

小・中学生の一貫した防災教室を実施。

- ◆レベル差の大きい小学生の低学年はわかりやすい紙芝居で、中高学年生には様々なプログラムを体験しながら、防災について考えてもらう機会となっている。
- ◆中学生はDIG、HUG、備蓄品の3パターンを経験し、「非常時には自分たちの学校が避難所になること」「地域が中学生に期待していること」などについて考えてもらう機会となっている。

【アピールしたい防災活動の成果】

「地域の子供は地域で守る」

- ・学校だけでなく区長会、民生委員会、福祉推進員などの協力のもと「地域の子供は地域で守る」と地域全体としての取り組みに発展している。
- ・子どもたちが「家族以外の大人」とつながる機会となり「自分も地域の一員として地域のためにできることがある」ということを考える機会となっている。

「自分の命は自分で守る」

- ・これまでの参加で「自分の命は自分で守る」という意識が高まり、上級生は下級生を指導したり、家庭に戻り「家族防災会議」の実施につながっている。
- ・地域との関わりが薄くなりがちな親世代に「地域とつながることが自分の子どもや家族のためになる」ということを考える機会となっている。

【活動内容の詳細】

- ・小学生は、防災紙芝居やクイズ、割れガラス体験、救急救命体操、ドローンの実演、パッククッキング、段ボールでの避難所設営とそこでの家族防災会議など、地域の大人と一緒に楽しく体験してもらっている。
- ・中学生は、地域を撮影したドローンからの映像をもとに地域の危険箇所を確認したり、避難所でのトイレ事情などについて考えてもらっている。

【活動成果】

<実施者から見た効果>

- ・中学生は年ごとに3つのパターンを体験し、小学生からの勉強と併せ、大災害時に求められる中学生に成長してきていると確信する。
- ・参加した区長らが区に持ち帰り、防災訓練などで地域全体の防災意識を高める一助になっている。
- ・防災・減災対策で重要な「ご近所づきあい」が結局は「まちづくり」につながることを皆が認識し始めている。

【団体の紹介】

- ・中津川市落合地区
- ・平成28年4月～令和3年12月
- ・会員数：73名
- ・地域の区長、民生委員、福祉推進員、学校、保護者、老人クラブ等の役員で構成し、高齢者への支援や地域の安心安全に関わる活動に力を入れている。



<参加者等から見た効果>

- ・「いかにして自分を守るのか」具体的な対策を知ることができた。
- ・「非常時に家族以外に頼れる人がいる」ことを知ることができ安心した。
- ・関係が薄れつつある地域とのつながりの必要性を再確認できた。

コロナ禍の防災活動Ⅱ

【活動内容の特徴】

近隣4自治会共助の防災活動

自治会長や防災担当 民生委員などの各町内代表者が出席するWeb会議で、避難所運営計画を策定

在宅避難※を可能にする自助の備え啓発活動の促進
(※昨年の全世帯アンケートで希望避難先第1位)

【アピールしたい防災活動の成果】

実践的な避難所運営計画を策定

学校側の協力を得て、避難所運営の中心メンバーにゾーニング現場説明会を実施した。また、感染症対策の分散避難先を確保した。

自助の備えは、まだまだ不十分であることが明らかになった。



星和中学校 現場説明会

【活動内容の詳細】

指定避難所星和中学校のゾーニング

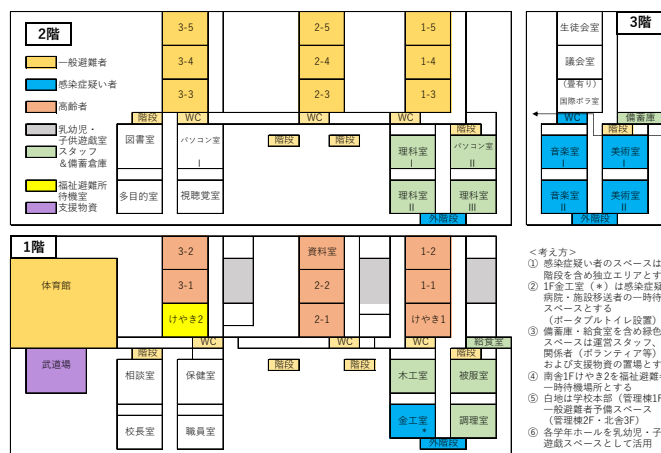
Web会議メンバーで学校構内を視察

屋内外の利用方法とゾーニングを検討



星和中学校 現場説明会

学校防災コーナーに最新のハザードマップを掲示
(学生の皆さんに災害に対する注意を喚起)
自治会活動の中心メンバーに現場説明会を開催



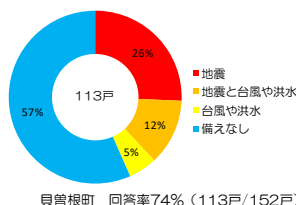
各町内に分散避難先を確保

届出避難所：公民館2ヶ所、お寺1ヶ所
提携避難所：保育園1ヶ所

自助の備え現状

在宅避難のための準備状況（一つの自治会でサンプル調査）

- ・57%の家庭は備えなし
- ・備えの内容も不足
定期的見直し 33%がなし
消耗品備蓄量 69%が1～2日分



星和中学校 防災コーナー

星和町校区を縮小

【活動成果】

<実施者から見た効果>

- ・新たに2つの自治会がオブザーバーで参加するなど、活動が地域に浸透・定着してきた。
- ・本活動を契機として、防災に対する意識と知識が深まり、災害未然防止の重要性を痛感した。共助と自助の事前の備えを促進していきたい。

<参加者等から見た効果>

- ・「避難所は、近隣自治会が共助で運営するものである」との自覚ができた。
- ・指定避難所である星和中学校との信頼関係が構築され、避難行動・避難所生活に対する住民の安心感が増した。

校種を越えた防災タウンウォッチング (五感を使った防災教育プログラムの開発)

【活動内容の特徴】

防災教育の応用編＋地域の災害・防災を知る

小中学校では、知識としての防災教育は受けているが、それを活用する機会がなかった。それぞれの**学びを繋ぎ、実生活に活用できる事業とした。また校種間でコミュニケーションを取る**ことで、連携する仕組みを作り、普段生活する街に潜む危険箇所や避難経路、避難場所などを確認することで防災にふれた。

【アピールしたい防災活動の成果】

災害図上訓練を現実の街での行動に反映する！

- ①校種間の交流の機会をつくり、お互いの学びや経験を増やす。
- ②五感を使って防災に触れ、自分の生活に活用する。

上記を目的とし、次の世代を担う子どもたちの新たな学びを行政、学校、地元防災士会がそれぞれの強みを発揮しながら創り上げた。

【活動内容の詳細】

「見つける」「やってみる」「考える」をキーワードに 防災の取り組みを「ジブンゴト」化する

教育委員会学校教育課長
市内学校への事業周知と
該当する学校への
協力依頼及び参加依頼

地元防災士
当日プレゼンの作成(調査)
コース並びにミッション設定
子どもたちへのレクチャー

民間教育支援会社社員
イベントの企画・全体調整
協力団体への依頼
広報ツールの作成

コースには、**ハザードマップ、AED設置場所、指定避難場所、秋葉神社(防火の神)、公衆電話、河川監視カメラ等、街中にある防災・災害に関わる施設を設定**した。それらをゲーム的要素を入れながら、見つけ触れることで、防災に親しむプログラムづくりを行った。

飛騨市学園構想では、校種間交流、学校・地域との連携、防災教育などのカリキュラム編成・実施を進めており、その試金石となる事業である。今後数年をかけて、市内各校区で実施できるように、地域学校協働活動推進員や防災リーダーも巻き込む計画を進める。

【活動成果】

<実施者から見た効果>

- ・**市教育委員会学校教育課が関わる**ことで、小中高の連携や市内への展開が容易となった。
- ・**防災士が関わる**ことで、街の防災に繋がる情報を探し、コンテンツやコース作り、防災活動のヒントとなった。街への活動PRになった。
- ・**教育支援会社社員のファシリテーション**能力により、資質能力ベースの学びの機会になった。

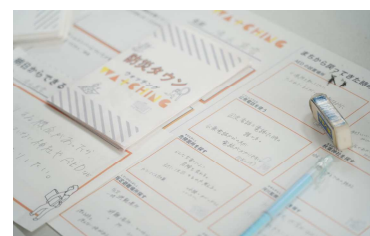
<参加者等から見た効果>

- ・**実際に街を周り、それぞれのミッションの意味を知ること**で、**次につながる行動を宣言**することができた。「親の電話番号をメモして通学バッグに入れる!」「家の周りの危険箇所を探す」等。
- ・これまでの学びを活かし**小学生がリーダーシップを取るなど、主体的に活動**できた。

【団体の紹介】

飛騨市学園構想防災タウンウォッチングコアチーム

- ・活動期間：令和3年6月～12月
- ・実働3名（市教育委員会学校教育課長、防災士・民間教育支援会社社員）
- ・協力者（小中高教員、防災士会、ひだチャレンジクラブ）



地域人材を活用した持続可能な防災教育の実施 ～古川やんちゃ学（ふるさと教育「防災」）～

【活動内容の特徴】

持続可能な防災教育には地域との連携が必要

令和2年度から始まったコミュニティスクールの実施に伴い、学校と地域連携を模索。学年毎にふるさと学習プログラムを作成する地域人材（ふるさとアドバイザー）を配置し、先生の異動等があっても持続可能な学びを提供。5年生は防災関係者が参画し実社会との接点をアドバイザーが主導してコーディネートした。

【アピールしたい防災活動の成果】

学校の授業では学べない多様な防災教育を提供！

教科書をベースにした学びを、更に実社会での行動に結びつけられるように、語り部による被災体験談講話、公衆電話の利用方法、避難所生活の体験、治水ダムの見学、マイタイムラインの作成など、体感できるプログラムを学校の先生と地域防災士が協働して作り上げた。子どもたちも新しく知ることが多く興味深く取り組んだ。



【活動内容の詳細】

授業と実社会の学びを繋ぐ！学校と地域で協働！

年度当初に5年生担当の先生と、一年間に子どもたちに得てほしい知識や行動を話し合い授業で学ぶ単元とリンクできるように、防災教育プログラムの実施時期や、各学期ごとにテーマを決めて行った。学校での学びを家族でも話し合いができるように、夏休みの宿題として「家庭内DIG」で話し合いの機会を作った。

初年度)「聞く・見る・体験する」で知識の定着を

- ・台風被害時の行政の取り組み紹介（公助）
- ・河川や治水ダムの見学
- ・台風等のマイタイムラインの作成（自助）

2年目)年間カリキュラム化に挑戦

- 1学期：地震について（被災体験談、避難所での生活について、断層について、家庭内DIG）
- 2学期：水害、土砂災害について（土木事務所職員によるレクチャー、ダムの見学）
- 3学期：下学年への説明（1、2学期で学んだ事をまとめ、伝える（アウトプット））【予定】



【活動成果】

<実施者から見た効果>

- ・初年度はコロナ禍による臨時休校による授業時間の制限はあったが、行政、防災士会と学校を繋ぐことができた。
- ・2年目は、年間計画ができたことで、多様な学びを学校側に提案し、学期毎のテーマを決め、子どもたちにとって関連性を感じてもらうことができた。

<参加者等から見た効果>

- ・風呂敷の使い方の授業では、風呂敷自体を知らない子もいて、バッグや頭巾にもなることを伝え、非常持ち出し袋に入れて置くなど行動に結びついた。
- ・公衆電話の使い方を学んだ子どもたちが、防災タウンウォッチング事業に参加して、自分からやってみるなど、学んだことを使うことで自己肯定感が高まった。

【ぎふママ減災スタディ】

ママのための防災BOOK（水害編）制作／活用セミナー

【活動内容の特徴】

私たちはプロじゃない。ママ目線で伝える防災。

「一緒に学んでいきましょう。」

防災に関心のない子育て世代にこそ、ママ目線で本当に知りたいこと、知ってほしいことを盛り込んだ冊子を制作した。

さらに、冊子を活用したセミナーを実施。

【団体の紹介】

- ・岐阜県岐阜市域
- ・2016年6月～現在
- ・実働人数7人／正会員総数20人
- ・ママたちの生の声から、子育て世代を取り巻く社会課題を解決し、子育てしやすいまちづくりの実現をめざす

【アピールしたい防災活動の成果】

ママだからこそ知りたい情報に特化！専門機関と連携！

- ・専門家からのアドバイスと情報を噛み砕いた表現と、実際に試して気付いたり工夫できるアイデアを掲載し、伝えた。
- ・ママだからこそ知りたい**避難所事情**など一歩踏み込んだ情報にも触れた。
- ・岐阜市都市防災部／国土交通省 中部地方整備局木曽川上流河川事務所などの**専門機関と連携**。
- ・平時での情報確認や、有事の際にママが本当に使えると感じた**プッシュ型情報配信システム**の利用方法について掲載。

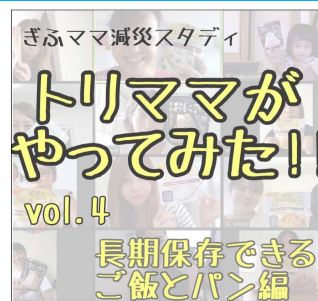


【活動内容の詳細】

ママからママへ。試して伝える、伝わる

- ・会員がそれぞれの家庭にて【簡易トイレ】【非常食】【缶詰】【水で戻すカップ麺】【防災リュック】など数十種類以上を試した。→子どもだけで食べられる大切さ、おいしさなどの観点でレビューを掲載。

- ・子育て支援センターと連携し約20組の親子と冊子を活用したセミナーを実施。グループワークと、簡易トイレ体験を行った。→アンケート「今後、家庭での備えを実践しますか」という設問に対し、100%が「はい」と回答。



【活動成果】

<実施者から見た効果>

- ・当事者であるママたちが試したことを掲載することで説得力が高まり、家庭や地域での防災対策への意識向上の一助となった。
- ・専門機関や専門家と私たちNPOが連携することで、当事者目線だからこそできる情報の発信の大切さとニーズの高さを実感した。

<参加者等から見た効果>

- ・自分の住んでいるところは安心と思っていたが、しっかりと見直すきっかけになった
- ・これまで簡易トイレを試したことがなかったが、このように使えるのだという発見になった。100円均一で手軽に買えるものということもわかったので早速備えようと思う

市民が発信！ラジオ番組による防災力の向上

【活動内容の特徴】

市民メディアにより防災意識の相互向上

まず市民自らが防災減災に関する情報発信ができるようになる。そして番組作りやラジオ放送などメディアを活用することにより、より広く多くの市民に防災減災についての内容を伝え、防災意識をより高め、相互の関係する活動の活性化を目指す。

【アピールしたい防災活動の成果】

コミュニティFMラジオを活用し地域の防災力を向上

災害時に情報入手ツール第1位のラジオを活用し、市民自らが情報発信する。家事や仕事をしながら聴くことができ、若者の活字離れにも対応できる。災害時にも情報入手そして情報発信が出来る市民を増やし、地域全体としての防災力を高める。

【活動内容の詳細】

情報弱者にも優しい情報発信！受信者の意識向上で大きな共助

手軽な情報ツールの一つであるラジオは情報弱者にも優しい。発信するのはハード＆ソフト面で難易度が高い。日常的な取り組みが必要。平時は市民活動を広く扱う市民メディアとして活動。

- ・ ほぼ隔月 専門家を招き防災勉強会、行政担当者とも打合せ
- ・ 第2第4日曜日 1回60分4枠構成の番組を2週分収録
- ・ 毎週放送する番組の約25%が防災減災に関する内容
 - 通常番組（歴史、災害対策、医療福祉、食育、整理術など）
 - 特別番組（2枠以上連続：防災特番、若者企画など）
- ・ 2021年はコロナ禍における防災減災情報を特集し番組に

みんなの森ぎふメディアコスモスは、市立中央図書館、市民活動交流センター、多文化交流プラザの複合施設で、岐阜市における防災拠点として位置づけられている。様々な情報が集まり、市民活動および外国人などの情報弱者への窓口ともなっている。

この取組は、地域としての情報発信&情報入手を促進し、発信者と受信者の相互をつなぎ、共助を大きく担うものである。

【活動成果】

<実施者から見た効果>

大学、高専、防災士、地域リーダー等の防災に関わる専門家の見識を得て、地域づくり活動の実践者、行政担当者、若者たちに防災減災の意識啓発ができるようになった。また番組作りを通して、これら取組をより多くの市民に放送メディアとして伝えることができたようになった。

【団体の紹介】

みんなのラジオ「てにておラジオ」

- ・ だれもが番組を作ることができる市民による市民のためのラジオ
- ・ 2015年7月発足。みんなの森ぎふメディアコスモスを拠点に、毎月第2第4日曜日に公開収録、会員自らがラジオ番組制作。
- ・ 毎週FMわっち78.5MHzで放送&ネット配信
- ・ 個人会員37、団体会員1



ぎふメディア
コスモスで
公開収録



市民が番組制作・情報発信



会員が技術面も担当



専門家を招き防災特番

<参加者等から見た効果>

任意組織であるため参加しやすい。勉強会や公開収録の参加者から、高い評価を得ている。年2回開催している番組審議会では話題となり、多くの評価と改善点を得ている。ネット配信も同時にあり、海外のリスナーから反応など、発信・啓発は相当できていると思われる。番組を録音したCDの依頼もある。